

# 経済原論Ⅰ

## マクロ経済学入門

no.1

麻生良文

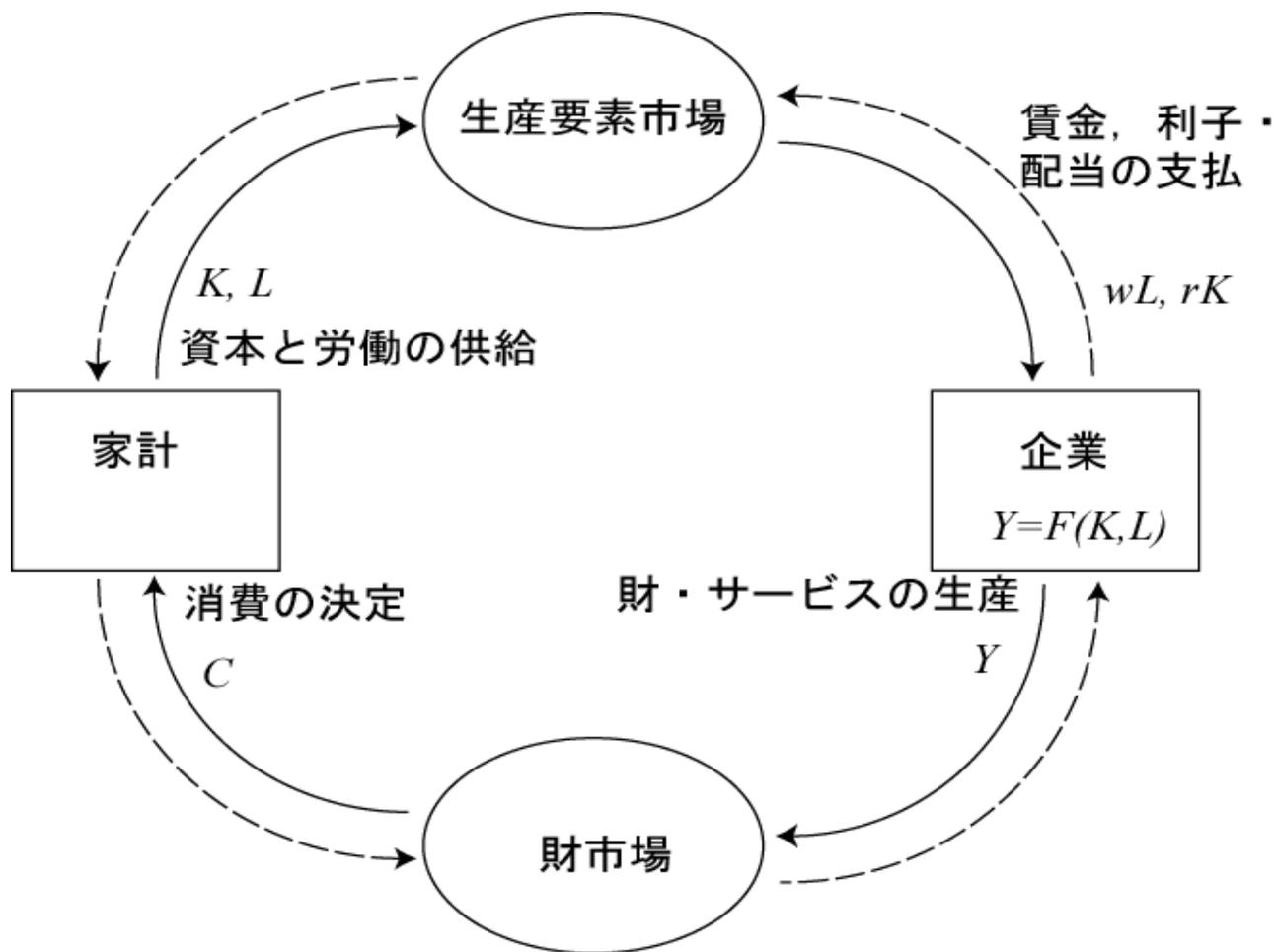
# 経済学入門

1. ミクロ経済学とマクロ経済学
2. ケインズ経済学と古典派マクロ経済学
3. 経済学の特徴
4. 経済学の基礎概念
5. 部分均衡分析の応用（市場の機能）

# 1. ミクロ経済学とマクロ経済学

- マクロ経済学
  - 経済全体の変数がどう決まるか（GDP, 物価水準, 経済成長率, ….)
- ミクロ経済学
  - 家計や企業的意思決定 → 合理的選択
  - 個々の市場の分析
  - 一般均衡分析と部分均衡分析
- マクロ経済学も一種の一般均衡モデル

# 経済循環図



——— 財・サービスの流れ      - - - - - お金の流れ

生産と分配 :  $Y = wL + rK$

生産と支出 :  $Y = C$

## 2. ケインズ経済学と古典派マクロ経済学

- ケインズ経済学
  - 1930年代の大恐慌に対する J.M.Keynes の処方箋
    - 不完全雇用を前提にした議論
    - 総需要の刺激策が必要
      - 財政支出の拡大, 減税
      - 流動性のわな 金融政策無効論
  - ミクロ経済学的基礎を欠いていた
- 古典派マクロ経済学
  - 完全雇用を前提にした議論
    - マネタリズム
    - 新しいマネタリズム (合理的期待形成学派)

# 現代のマクロ経済学

- 新古典派総合（1960年代）
  - かつては，マクロ経済学とミクロ経済学の矛盾は深刻なものと考えられなかった
  - Samuelson ケインズ経済学で完全雇用が達成できれば，ミクロ経済学による分析が妥当になる
- 1970年代の「革命」
  - 期待の重要性，ミクロ的基礎の重要性
- 現代のマクロ経済学
  - ニューケインジアン
    - 何らかの市場の失敗を前提
    - ケインズ的政策の有効性
  - 古典派マクロ経済学
  - リアル・ビジネス・サイクル理論
  - 新しい成長論

# 3. 経済学の特徴(1)

## 3.1 現代の政策課題

- 金融政策
  - デフレーション
  - アベノミクス, FTPL, MMT
- 構造改革 vs. 景気対策
- 財政赤字・公債残高の累増
- 少子・高齢化と社会保障制度改革
- 地方分権
- 公共事業
- 特殊法人改革（郵貯, 道路公団, 財政投融资）
- 格差社会? 市場原理主義の帰結?

# 3.経済学の特徴(2)

## 3.2.分析方法の特徴

- モデル化
- 数式・グラフの多用
- 理論モデルの構築 → 仮説の統計的検証
- 家計や企業の意思決定は合理的（特にミクロ経済学）
- 個々の意思決定が他者に与える影響も考慮

## 3.3.実証的問題と規範的問題の区別

## 3.4.理論モデルの役割

- 異なるモデル → 異なるインプリケーション（財政政策の効果）
- 複雑な現実 → 単純なモデルで理解する必要
- 一般的なモデルは一般的には存在しない

# 経済学の特徴(3)

## 3.5.応用経済学

- 国際貿易
- 財政学・公共経済学
- 金融論・ファイナンス・金融工学
- 産業組織論
- 開発経済学
- ゲームの理論

## 他分野への応用

- 政治学 公共選択の理論
- 歴史 数量経済史, 公共経済学の応用
- 結婚や出産, 家庭内生産          社会学の分野?
- 法と経済学
- 環境問題

# 4. 経済学の基礎概念

## 4.1. 機会費用(opportunity cost)

- 予算制約
- 生産可能性フロンティア

## 4.2. 交換の利益

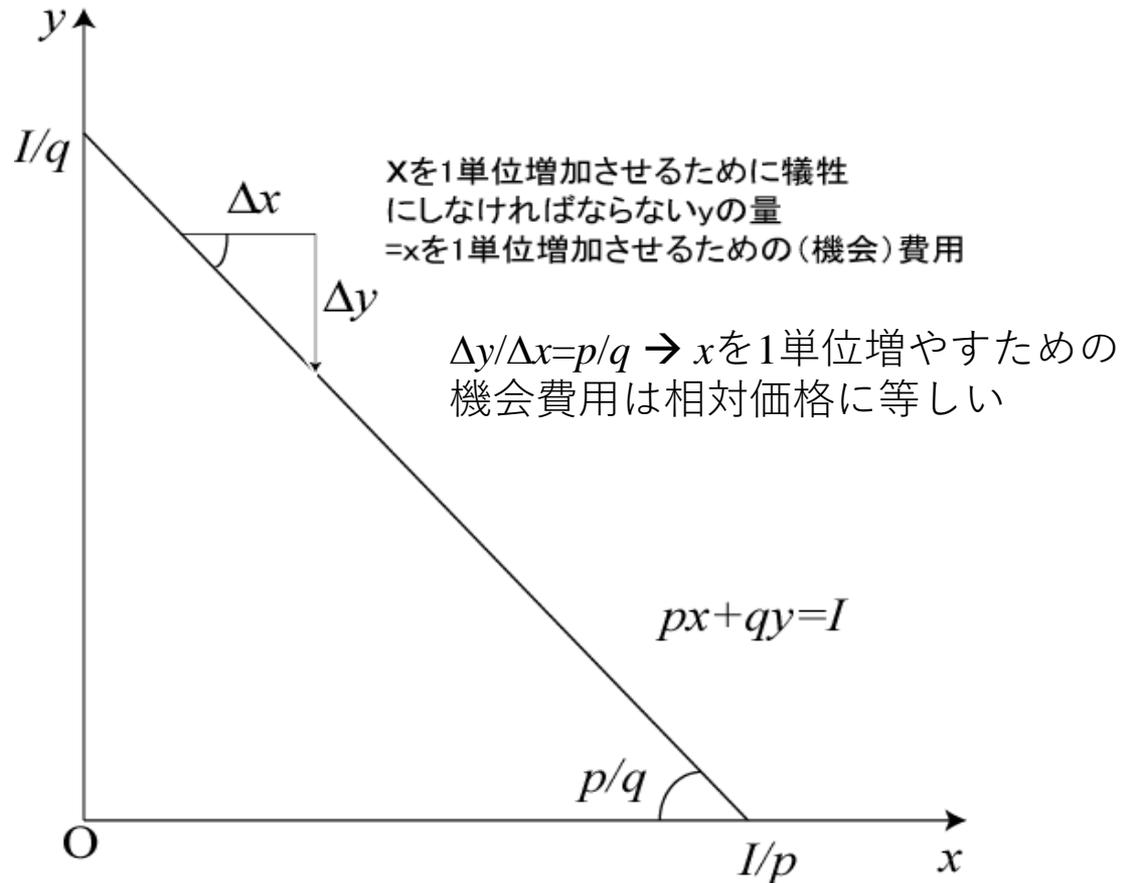
- 比較優位と絶対優位

## 4.3. 市場(market)の機能

- 消費者余剰と生産者余剰
- 市場の失敗

# 予算制約

$x$ : 財 $x$ の購入量,  $y$ : 財 $y$ の購入量  
 $p$ : 財 $x$ の価格,  $q$ : 財 $y$ の価格,  $I$ : 所得  
予算制約式:  $px + qy = I$



# 生産可能性フロンティア

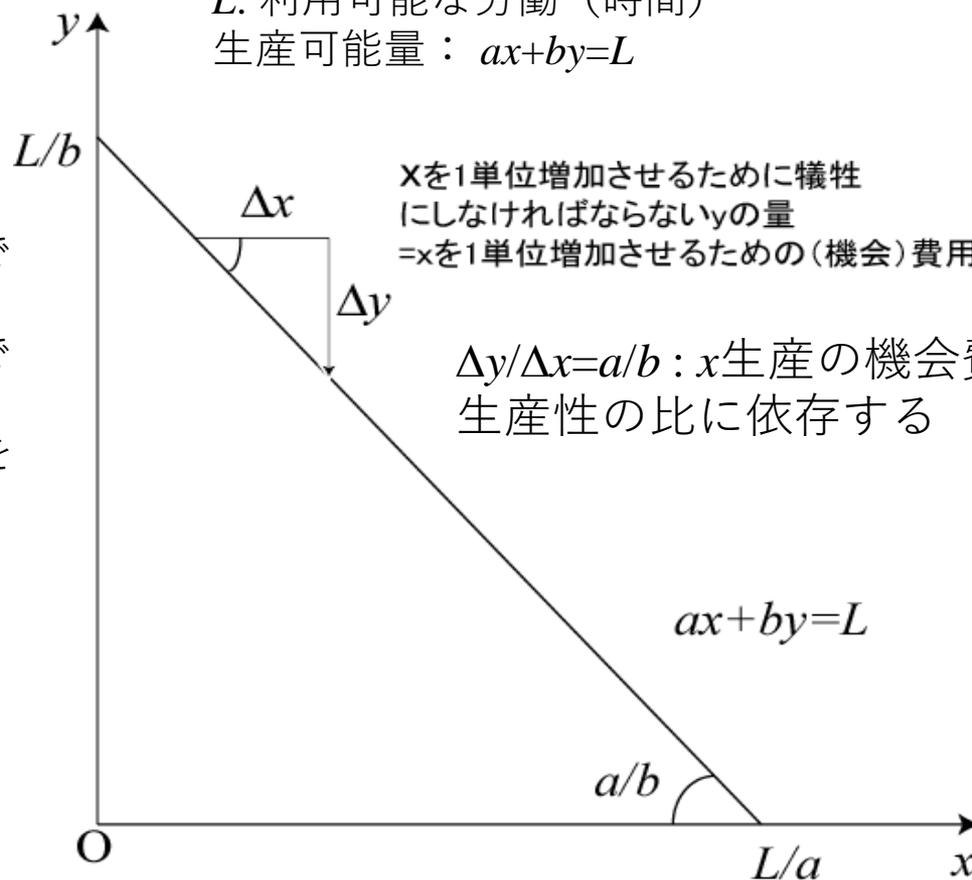
$a$ : 財 $x$ を1単位生産するために必要な労働 (時間)

$b$ : 財 $y$ を1単位生産するために必要な労働 (時間)

$L$ : 利用可能な労働 (時間)

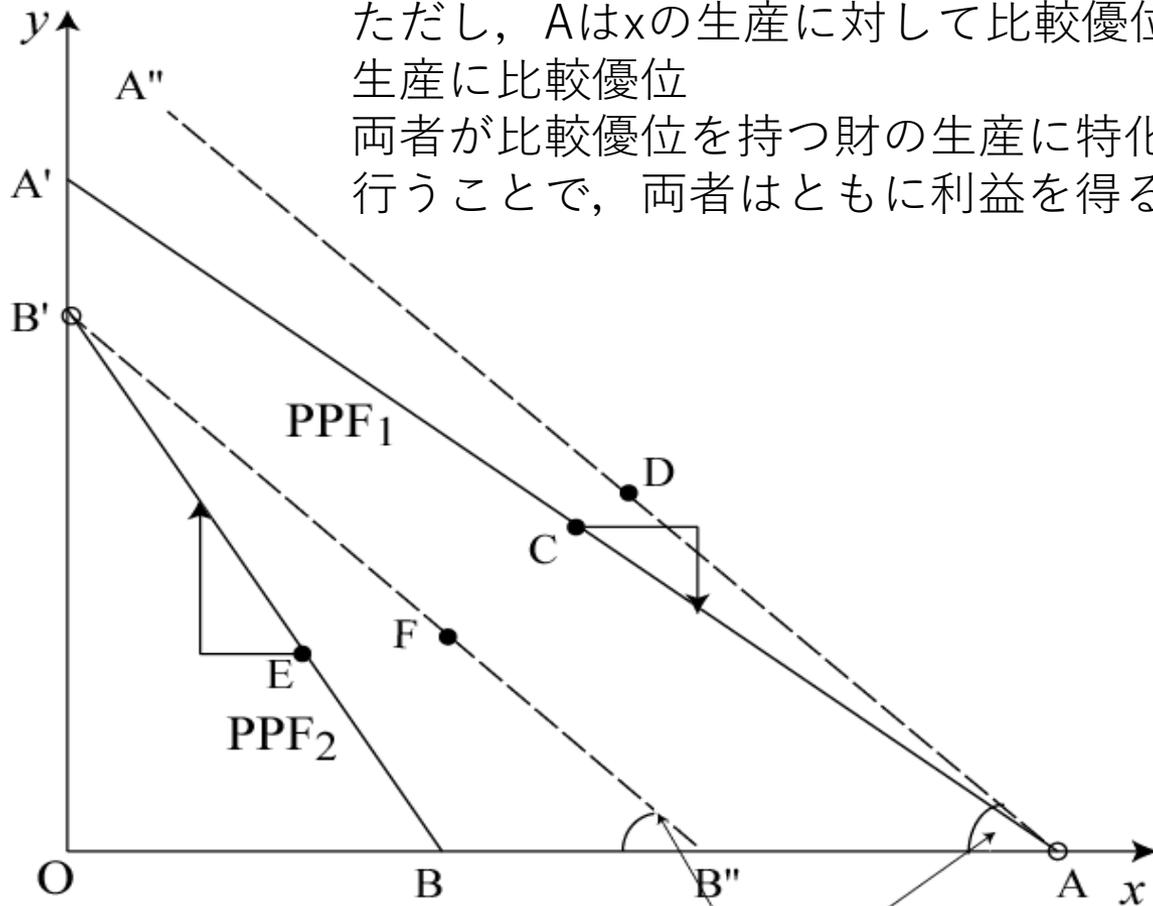
生産可能量:  $ax+by=L$

1時間の労働で生産できる $x$ の量:  $1/a$   
1時間の労働で生産できる $y$ の量:  $1/b$   
 $1/a, 1/b$ : 労働生産性を表す



# 交換の利益

個人Aの生産可能性フロンティア：AA'  
個人Bの生産可能性フロンティア：BB'  
Aは両方の財の生産に絶対優位を持っている  
ただし、Aはxの生産に対して比較優位、Bはyの生産に比較優位  
両者が比較優位を持つ財の生産に特化し、交換を行うことで、両者はともに利益を得る



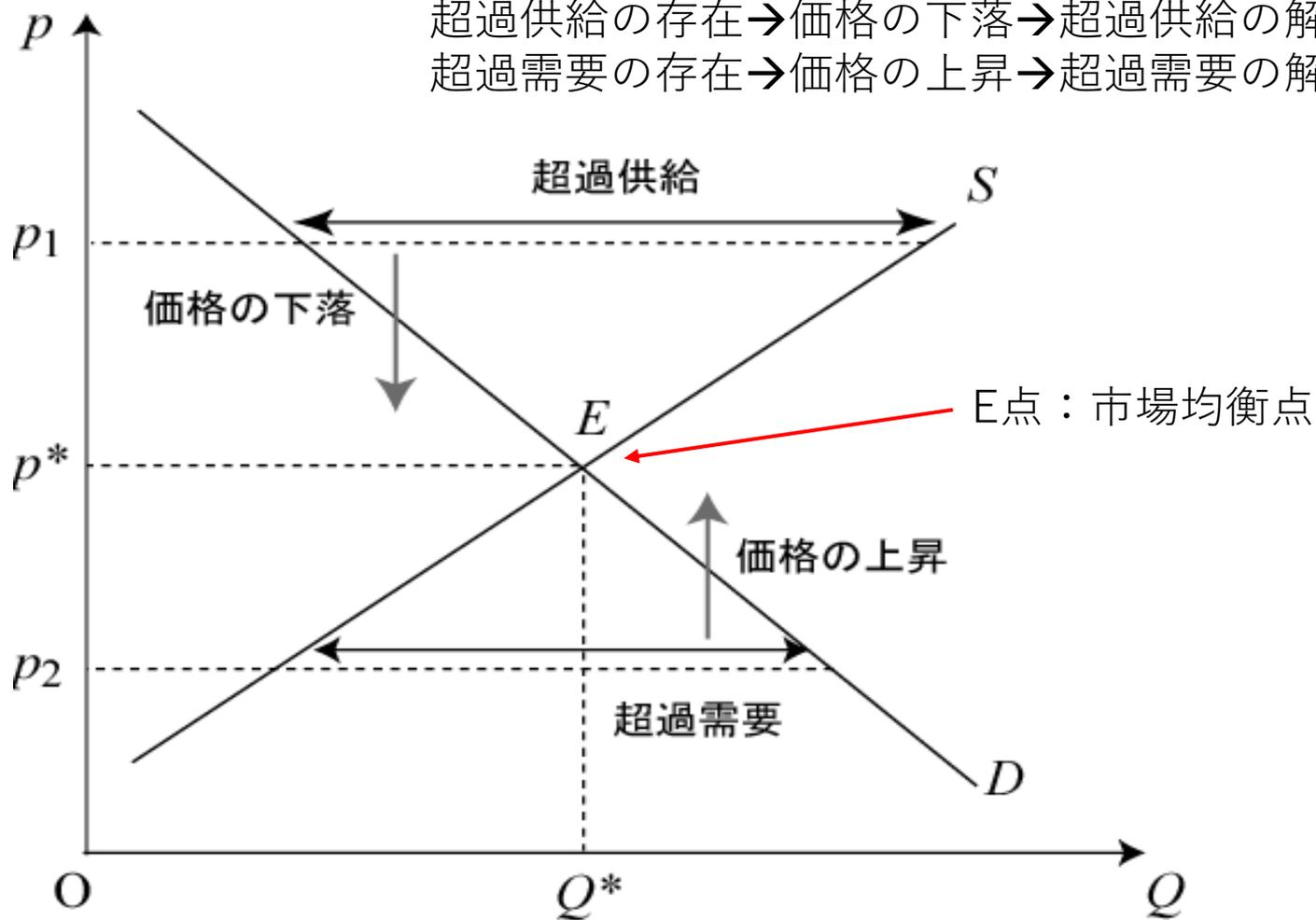
市場での交換比率  $p/q$

# 市場の機能(1)

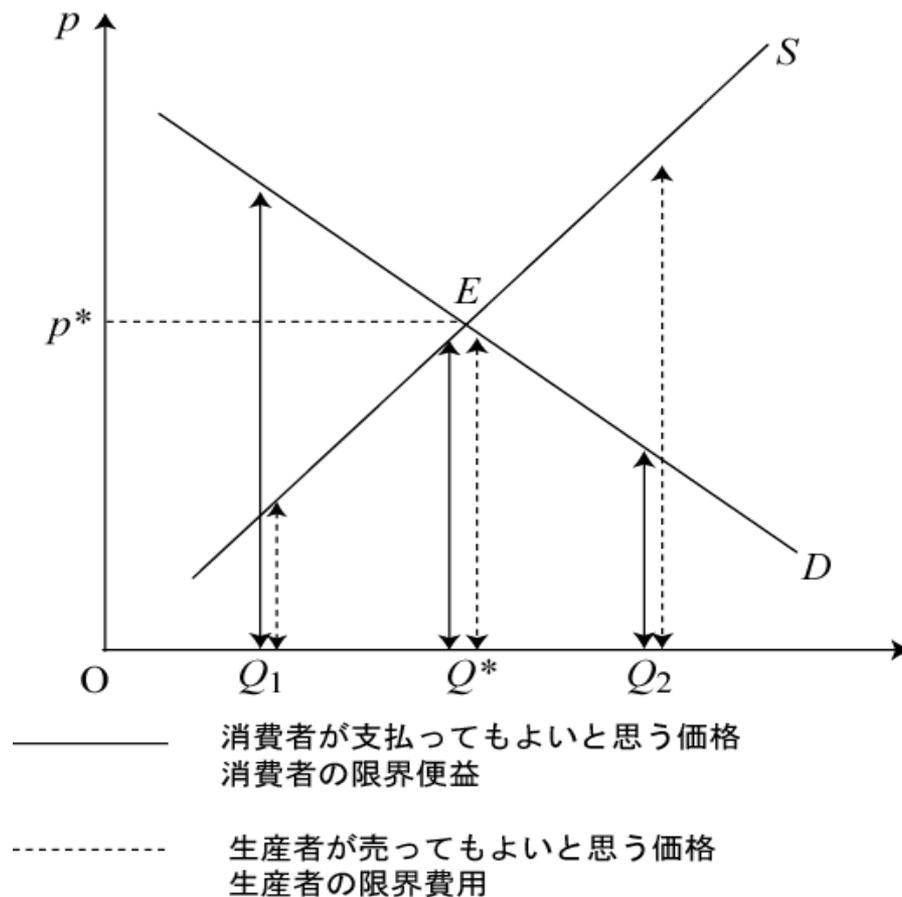
市場の機能の通常解説

超過供給の存在 → 価格の下落 → 超過供給の解消

超過需要の存在 → 価格の上昇 → 超過需要の解消



# 市場の機能(2)



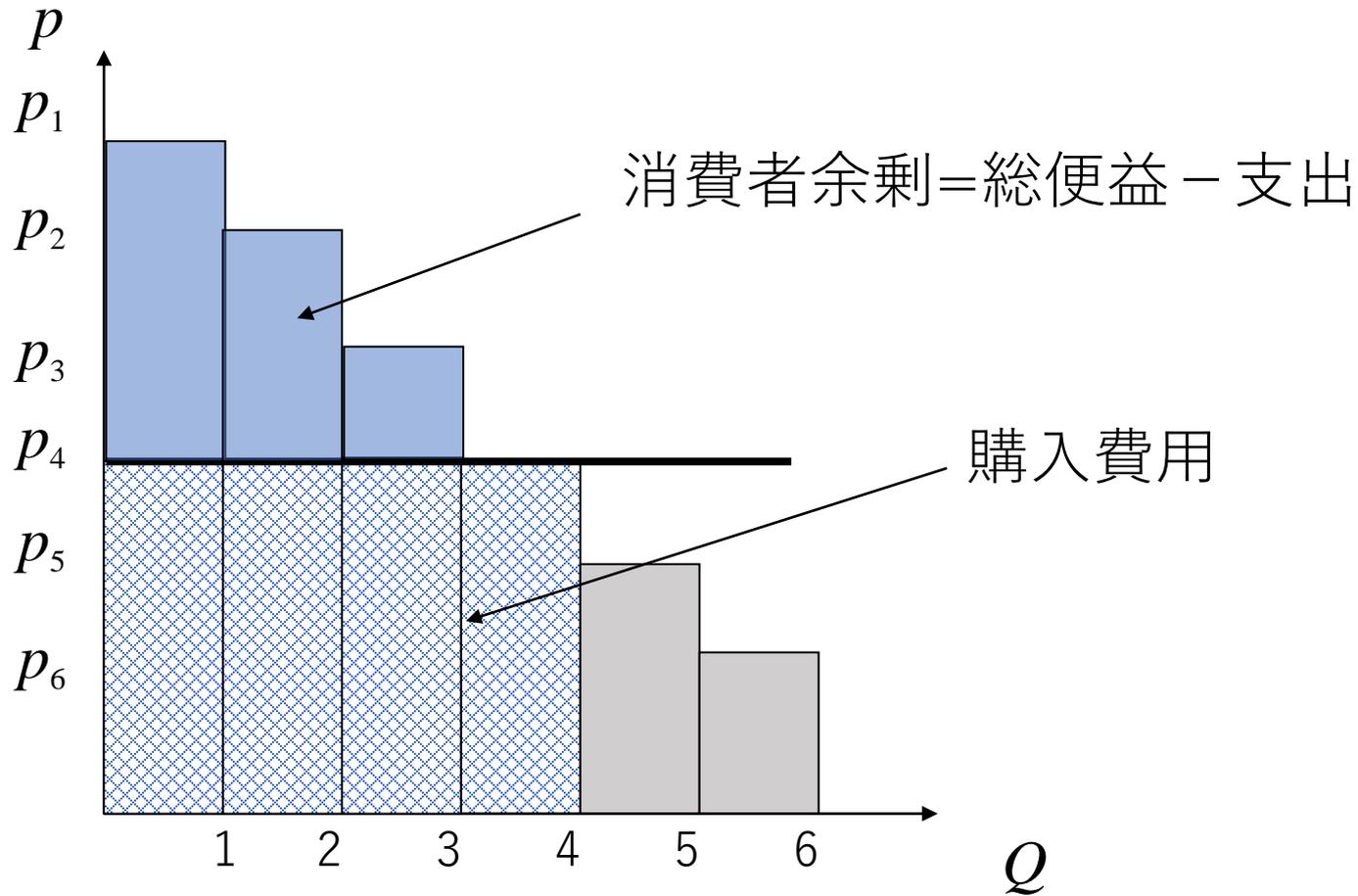
需要曲線と供給曲線の背後にある  
消費者や生産者の意思決定

需要曲線の高さ：次の1単位につ  
いて消費者が買ってよいと思う  
最大限の価格 = 消費者の限界便益

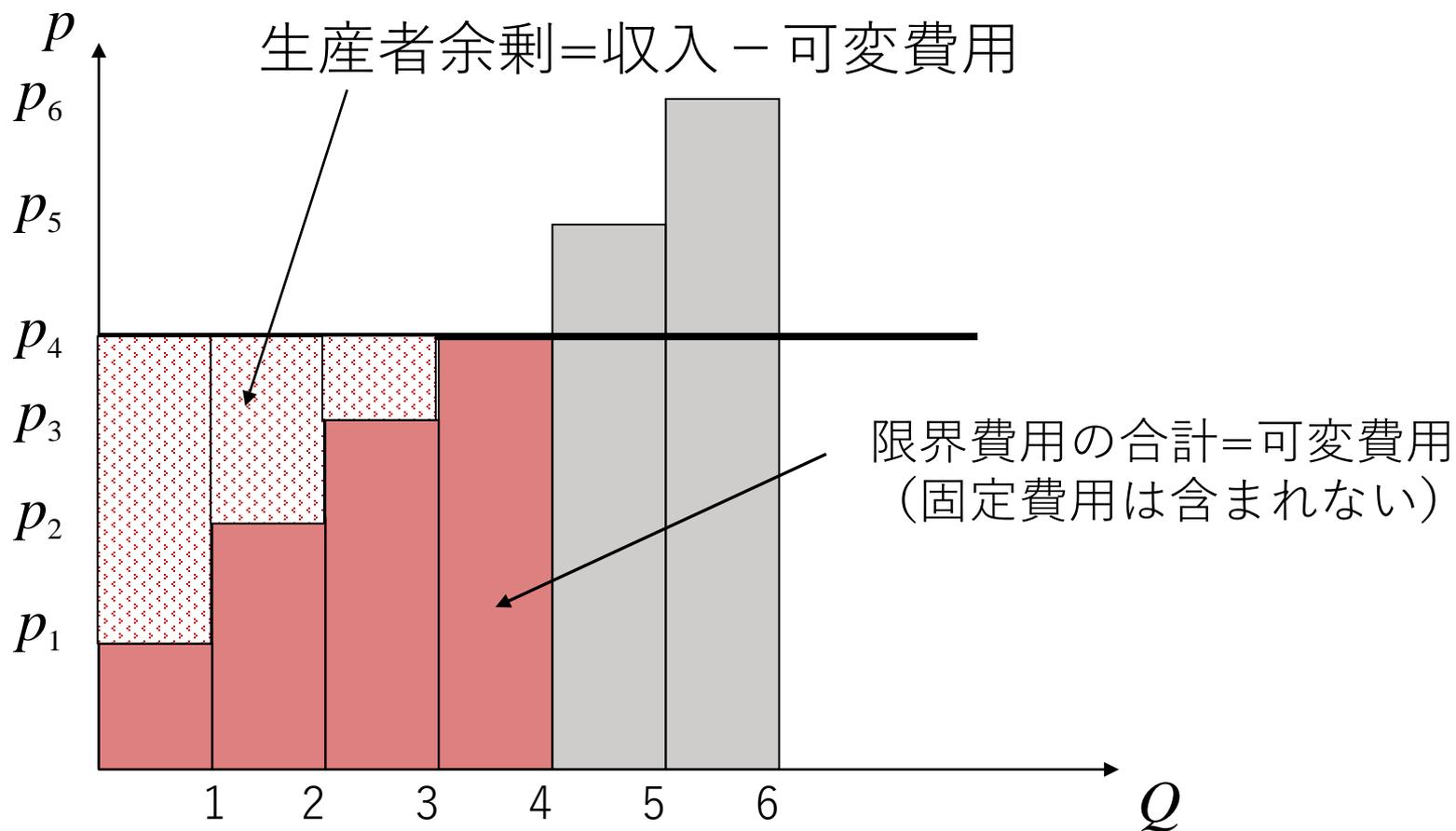
供給曲線の高さ：次の1単位につ  
いて生産者が売ってもよいと思う  
最低限の価格 = 生産者の限界費用

価格は $p^*$ に決まるが、この時、消  
費者は価格以上の満足を得ている  
ことに注意。同様に、生産者は費  
用以上の収入を得ている

# 消費者余剰 consumers' surplus

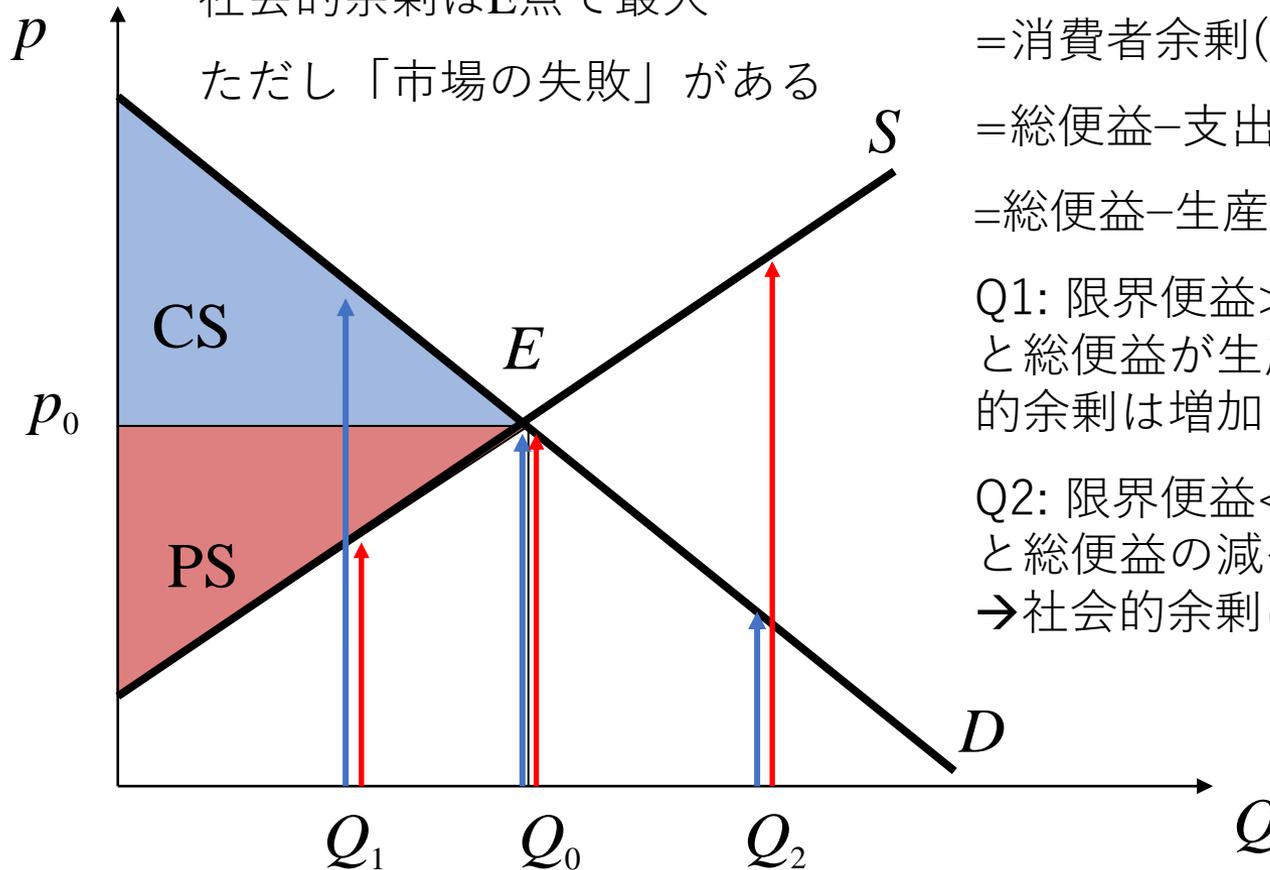


# 生産者余剰 producers' surplus



# 社会的余剰（総余剰）

市場均衡の望ましさを→  
社会的余剰はE点で最大  
ただし「市場の失敗」がある



社会的余剰

=消費者余剰(CS) + 生産者余剰(PS)

=総便益-支出 + 収入-生産費用

=総便益-生産費用

Q1: 限界便益 > 限界費用 → Qを増やす  
と総便益が生産費用以上に増加 → 社会的  
余剰は増加

Q2: 限界便益 < 限界費用 → Qを減らす  
と総便益の減少以上に生産費用が減少  
→ 社会的余剰は増加